

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720237

研究課題名(和文) サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究

研究課題名(英文) A sociolinguistic study on the diversity of Karafuto Japanese Dialect in Sakhalin

研究代表者

朝日 祥之 (Asahi, Yoshiyuki)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：50392543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性を、特に日本語を第二言語として習得した人たち(朝鮮人、アイヌ人、ウイльта人、ニヴフ人)に焦点をあてて調査研究を行った。調査では、既存の文字化資料、サハリンと札幌での現地調査によって収集された音声資料を活用し、樺太方言に見られる多様性について分析を行い、日本人の樺太方言話者が用いる言語的特徴を用いることなどを確認した。音声資料については、分析に活用するものを中心に書き起しを行った。調査結果については、国内外の学会、研究会で発表した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine peculiarities of the Japanese language features amongs t non-native speaker of Sakhalin Japanese (Korean, Ainu, Uilta and Nivkh). After collecting relevant research materials such as letter or manuscript (or transcripts) and the interview data which I conducted my interviews towards those Japanese language speakers. Analyses were made to examine the diversity of Sakhalin Japanese. I pointed out that their Japanese have a number of features in common with native speakers of Sakhalin Japanese.

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語生活

キーワード：サハリン 樺太方言 方言接触 北海道方言 ニヴフ語 ウイльта語

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本が1905年から1945年にかけてその南半分を領有したサハリンに生まれた樺太方言に見られる多様性の記述を試みるものである。申請者は、2003年以降、二つの科学研究費補助金の交付(平成17年度文部科学省科学研究補助金(若手研究(B))「サハリンに残存する日本語の地位に関する調査研究」(課題番号17720110,代表者朝日祥之)、平成20年度文部科学省科学研究補助金(若手研究(B))「樺太方言と北海道方言における言語変容に見られる関係についての調査研究」(課題番号20720128,代表者朝日祥之))を受け、サハリンと日本に居住する日本人の樺太方言話者を対象とした面接調査を実施してきた。これまでの調査研究から、樺太方言の形成を知る上で次の二点を強く認識するようになった。

(1) 一人でも多くの樺太方言話者への面接調査の実施

これまでの調査研究で多くの話者に調査を行っているが、より精度の高い記述を行うために、一人でも多くの話者に調査をする必要がある。一方、現実的には樺太方言話者の高齢化が進む上、2000年代後半にさらに本格化した永住帰国事業によって樺太方言話者が日本・韓国に居住するようになった。この状況に対応した調査設計を行う必要がある。

(2) 1990年代までの樺太方言の使用実態の把握

樺太方言のより正確な記述を行う上で、申請者が調査を行った2000年代よりも前の時期における樺太方言の実態を調べる必要がある。幸い、歴史学的研究、民俗学的研究で、サハリンに居住するニヴフ人、アイヌ人、ウイльта人、日本人、朝鮮人による日本語発話を古くは1960年代に収録したものを発掘することができた。これを活用した分析を行う必要もある。

2. 研究の目的

本研究は、サハリンで形成された日本語(以下、樺太方言と称する)に見られる多様性の解明が目的である。申請者によるこれまでの調査研究から、日本人の用いる樺太方言に関する知見を多く得た。それをもとに、1950年代、1990年代に日本語を習得したニヴフ人、ウイльта人、アイヌ人、朝鮮人を対象に収集された音声資料、サハリン・日本・韓国での調査で収集する録音資料を用い、各民族の第一言語、または、第二言語としての樺太方言の記述を行う。本研究は、その特異性を明らかにすることが目的である。本研究成果は、接触方言学、日本語教育、日本語習得研究などへの活用も期待できる。

3. 研究の方法

本研究は、樺太方言に見られる言語変容の在り方を、音声資料と日本・韓国・サハリンでの現地調査によって得られる資料から明らかにすることに目的がある。そのために本研究では、音声資料調査と面接調査を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果から明らかとなった点として、(1)ウイльта人、朝鮮人、アイヌ人の日本語(朝日2012)と(2)ニヴフ人の日本語(朝日2013)を取り上げる。

(1) ウイльта人、朝鮮人、アイヌ人の日本語
ここでは、(a)音声(b)形態レベルの特徴を見る。

(a) 音声

サハリンの日本語に見られる音声的特徴を取り上げる。北海道方言・東北方言の影響を強く受けている。両方言の特徴には音声的特徴があることは周知の通りである。

これまで収集してきた調査データから、次に音声的特徴が確認できた。発話例とともに見てみよう。なお、カッコ内は話者の【生年・性別・民族】を示している。

(a-I) イとエの混同

(1) エキ(息)エキ(息)かい

【1933年・女・ウイльта】

(a-II) カ行・タ行子音の有声化

(2) おかあさんに ニデル(似てる)

んだ ワダシ【1938年・女・アイヌ】

(3) したから 今度 もっと ツガワナイ

(使わない)から もっと できない

【1929年・女・朝鮮】

(a-III) チとツの交替

(4) いやー ナチガシカッタ、ナチガシ

【1926年・女・ウイльта】

(5) 10ガチ(月)10ガチ(月)6日

【1926年・女・ウイльта】

(b) 形態

サハリンの日本語に見られる形態レベルの特徴について述べる。形態レベルにおける特徴も確認されている。やはり北海道方言、東北方言の特徴を多く持ち合わせているが、中には西日本方言の特徴も垣間見られる。以下、その発話例とともに述べる。

(b-I) 格助詞「サ」の使用

(6) で そっちのほうサ 見で

(移動の方向)【1938年・女・アイヌ】

(b-II) 推量・意志の「ベ」

(7) あの 姉さん 来たら わかるべさ

(推量) 【1937年・女・朝鮮】

(b-III) 可能の「-ニイ」

(8) 日本だ 日本語だから みんな わかる シャべるニイ人だけけど【1930年・女・ウイльта】

- (b-IV) アスペクト表現「-テイル」「-トル」の使用
 (9) 外に 出て 遊んどッタ わけさ
 【1922年・男・朝鮮】
 (10) その 家で 食べて 仕事シトルから
 【1922年・男・朝鮮】
 この他にも例文 11 に見るような、コード切り替えも観察された。
 (11) もう一回乗る船いぐって (地名)さいつでもくるでしょ, パスポート調べに。Ещё один раз будет не волнуешься, поедем ещё. (もう一度船が出るから心配するな) Много (たくさん)も いっぱいいぐ 人 いるって【1938年・女・アイヌ】

(2) ニヴフ人の日本語

『ギリヤークの昔話』(アウステルリッツ, 村崎 1993, 北海道出版企画センター)の日本語の特徴として, 次の点が挙げられる。

(a)「ギリヤークの昔話」の「あとがき」にアウステルリッツ氏による日本語の特徴記述が見られるので簡単に紹介したい。

口述者の日本語の方言は, かなり気にかかることである。それはとくに中村チヨさんが学校にいないけれども, 日本語に加え, ウイルタ語を学んでいるところによる。彼女は数香の日本人(およびウイルタ)の住民たちから日本語を学んだ。この日本人住民たちは, おそらく漁民とその家族たちと海浜地帯で仕事に就いていた人たちによっていた。

彼女の日本語の特徴に関心を持つ読者は少なくない。標準語で「行こう」を「行くべ」, 「私を」を「俺ば」「だろ」は「だべ」という言葉の点でいえば, 「あさって」を「あさった」「交換する」は「ばくる」, 「白樺」は「がんび(の木)」「狩」は「またぎ」という。発音の面においては, 母音の交替があった。標準語の「オ」を「ウ」, すべての場合ではないが「エ」を「イ」としていた。このような言い方を「それ」というのを「スリ」となった。この他にも子音や抑揚についていろいろと特長があった(アウステルリッツ・村崎 1992:285)

(b) この他に認められる特徴を以下に挙げる。

(b-1) 格助詞「サ」の使用が数多く見られる。「ニ」の使用も認められるため, 両者が併用されているようである。しかしながら, 「サ」が優勢である。

(b-2) 文末に生起し伝聞を表す「ッテ」は, 「ト」となる場合が多い。引用・思考内容を表す場合も「ト」が多用される傾向にある。なお, この「ト」は「ド」と有声化する場合もある。

(b-3) カ行, タ行子音の有声化が認められる。

(b-4) 「チ」と「ツ」の交替が見られる。ニヴフ語の音韻体系に「ツ」がないため, 「チ」へと置き換わる。例:「ヒトチ」「ヒトツ」, 「キチネ」「キツネ」など

(b-5) 「ス」と「シ」の交替が見られる。「ミズ」が「ミジ」(なかには「ミジュ」)となったりするなど。

(b-6) 語彙的な特徴もいくつか確認される。「アルッテ」「歩いて」, 「ナンボ」, 「アマス」, 「〜ケ」, 「ゾウサナイ」など。

これらの言語的特徴は, 本研究がなされるまで指摘されてこなかったものである。この点で, 本研究が言語接触研究をはじめとする分野に与えたインパクトは大きい。同様の分析はこれからも継続的にすべき点である。研究期間は終了しているが, 期間中に収集できたデータを活用した報告を精力的に行っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

朝日祥之, 「樺太ことば集」にみる樺太方言と北海道方言の関係, 北海道方言研究会会報, 査読無, 89 2012年, 5-14

〔学会発表〕(計11件)

朝日祥之, ニヴフ語話者の日本語の特徴ー「ギリヤークの昔話」から見るー, 第204回北海道方言研究会例会, 2013年9月8日, 札幌市北区民センター

朝日祥之, 海を渡った日本語をみつめる, 人間文化研究機構第21回シンポジウム「海を渡った日本語」, 2013年9月1日, 一橋講堂

朝日祥之, オホーツク海方言の形成と特性, 国立国語研究所共同研究プロジェクト(日本語変種とクレオール形成過程)研究発表会, 2013年8月31日, 国立国語研究所

ASAHI, Yoshiyuki, Migration and Japanese language in Hokkaido, Sakhalin, and the Kuril Islands: their socio-cultural histories and linguistic outcomes, Japanese Anthropology Workshop 2013, 2013年3月9日, University of Pittsburgh

朝日祥之, 移動するサハリンの朝鮮人と日本語, 延辺大学国際共同研究発表会, 2012年9月, 延辺大学

ASAHI, Yoshiyuki and HIRAMOTO, Mie, Use

of foreign-origin personal pronouns:
Observations in overseas varieties of
Japanese, Sociolinguistics symposium 19,
2012年8月, Free University of Berlin.

朝日祥之, 「樺太ことば集」に見る樺太方言と北海道方言の関係, 第195回北海道方言研究会例会, 2011年11月9日, 札幌市北区民センター

ASAHI, Yoshiyuki, Same dialects, similar contact settings, and different sociolinguistic histories: formation of the three regional koinés, METHODS XIV 2011年8月3日, University of Western Ontario.

ASAHI, Yoshiyuki, Linguistic outcomes of similar dialect contact situations in three Japanese-speaking communities, ICHL 20, 2011年7月28日, 国立民族学博物館

〔図書〕(計1件)

朝日祥之, 明治書院, サハリンに残された日本語樺太方言, 2012年, 160頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朝日 祥之 (ASAHI, Yoshiyuki)

国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号: 50392543